腰(こし)おれすずめ

むかし、ある山里に、おばあさんが住んでいました。

ある日のこと、庭さきに、腰(こし)のおれたすずめが落ちてきて、ちゅんちゅん鳴いていました。おばあさんは、かわいそうに思ってすずめをかごの中に入れ、えさをやってかうことにしました。

かわいがって世話をしているうちに、すずめは腰もなおって、かごの中をとびまわるようになりました。ある日、ふとしたひょうしにかごのふたが開いて、すずめはどこかへとんでいってしまいました。おばあさんは、あちこちさがしましたが、どうしても見つかりませんでした。

つぎの日、軒(のき)さきにすずめがとんできて、まどの外できれいな声で鳴きました。おばあさんが戸を開けてみると、庭いちめんに、ひょうたんの種(たね)がちらばっていました。おばあさんは、その種をぜんぶひろいあつめて、裏(うら)の畑にまきました。すると、きれいな芽(め)が出て花がさき、実がなって、大きなひょうたんがたくさんとれました。おばあさんは、よろこんで、ひょうたんをみんな軒さきの日当たりのよいところにつるしておきました。

十日ほどたつと、ひとつのひょうたんから、まっ白いお米がぽろり、ぽろりと落ちてきました。ひとつぶ拾って食べてみると、とてもおいしいお米でした。そこで、ひょうたんをぜんぶ下ろしてみたところが、どれにもこれにも、まっ白いお米がいっぱい入っていました。おばさんは、よろこんで、そのお米でごはんをたいて重箱(じゅうばこ)につめ、近所の人たちに配ってあるきました。おいしいごはんだったので、みな大よろこびしました。

ひょうたんのお米は、いくら出しても少しもへらなかったので、おばあさんは、たいそうなお金持ちになりました。

さて、おばあさんのうちのとなりに、欲(よく)ばりばあさんが住んでいました。欲ばりばあさんは、すずめの話を聞いてうらやましがって、すずめをとりにわざわざ山へでかけていきました。そして、一羽のすずめをつかまえると、腰をおって、かごに放りこみました。いっこうにえさをやらないので、すずめは苦しがってばたばたとびまわりました。ばあさんは、すぐにかごのふたを開けました。すずめは、どこかへとんでいってしまいました。

つぎの日、ばあさんが、

（すずめのやつ、どんなお土産（みやげ）を持ってくるかなあ）と思いながら待っていると、すずめがとんできてまどの外で鳴きました。戸を開けると、庭いちめんに、ひょうたんの種がちらばっていました。ばあさんは、おおよろこびで、種をぜんぶ裏の畑にまきました。すると、やっぱり、芽が出て花がさいて実がなって、たくさんのひょうたんができました。

欲ばりばあさんは、ひょうたんをみんな軒さきにつるして、

（米早くできよ。米早くできよ）と思って、毎日ながめていました。けれども、いつまでたっても、お米はこぼれ落ちてきません。ばあさんは、はらを立てて、ひょうたんをぜんぶ引っぱりおろし、ひとつひとつうちこわしました。すると中から、へびやら、むかでやら、はちやらが、うようよ出てきて、ばあさんをかんだりさしたりしました。欲ばりばあさんはとうとう死んでしまいましたとさ。

おしまい。

村上郁再話

資料『全国昔話資料集成11.　福岡昔話集』福岡県教育会編